# 空気がなくなる日

岩倉政治 著
吉井　忠 絵

# 空気がなくなる日

岩倉政治

913,6 岩倉政治
空気がなくなる日
新日本出版社 1969
194 p 21.5cm (新日本創作少年少女文学)

岩倉政治
いわくら まさじ
1903年富山県生まれ。
大谷大学哲学科卒。小学校教師，会社員をへて，小説・評論を執筆。
主な著書「田螺のうた」「村長日記」「人生ノート」

吉井 忠
よしい ただし
1908年福島市生まれ。
太平洋美術研究所修業。帝展，独立展などに出品，中村賞受賞。
主体美術協会，日本美術会会員。
主な著書「民芸論」「ピカソ」

新日本創作少年少女文学　空気がなくなる日

1969年11月30日　第1刷発行
1978年1月15日　第8刷

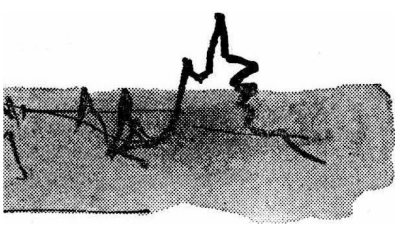
著者　岩倉政治
画家　吉井　忠
発行者　松宮龍起

郵便番号 112　東京都文京区大塚3－3－1
発行所　株式会社　新日本出版社
電話　(945) 8511(代表)　振替番号 3-13681
印刷　鎌倉印刷株式会社　製本　小高製本

落丁・乱丁がありましたらおとりかえいたします。

もくじ

すこしむかし……5
空気がなくなる日……9
スズ虫とラッパ……27
はい小屋じけん……47
しゃっきんとり……67
しんぱいこぞう……87
しんぱいこぞう(のつづき)……107



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

はちうえのなぞ……133
「てんころめし」からはじまる話……157
あとがき……192

装丁・さし絵

吉井（よしい） 忠（ただし）

# すこしむかし

「むかし」のことは、「むかしむかし大むかし」から生まれたんだし、「すこしむかし」のことは、「むかし」から生まれました。そして「今」のことは、「すこしむかし」から生まれたものです。

これが歴史というものでしょう。

そうだとすると、今のことをよく知るためにも、みなさんは「すこしむかし」の話をみてみませんか。そして、おとうさんおかあさんや、おじいちゃんおばあちゃんが、まだ鼻をたらして、むちゅうではねまわったり、ときには……ねどこでおしっこの失敗をしたりしていた子どものころと今とを、くらべてみませんか。

すこしむかしの、といっても、これは雪のふかい北ぐにの村での話です。

この子どもの村は、田んぼのなかにあって、すぐはなさきに高い山が青ぐろいびょうぶを立てまわしていました。暗い森や、草やぶの下をはしる川がいくつもあって、どういうわけか、たいていはおばけの巣になっているのです。

森の大杉からは、よく大きな茶がまがぶらさがってきて、人間の頭をゴキーンとやったり、小川のほとりには、カワウソやタヌキが、まるいおなかを出して、粉をひいていたり、人間とおばけの世界がなかよしみたいに、つうつうにつながっているようでした。

たいていの農家は、ちいさなカヤぶきで、冬がくると二メートルくらいの雪の下に埋まります。こうしてあたりいちめん、まっしろの世界になれば、おばけたちもいなくなるようでした。

おとなたちは、はたらいても、はたらいても貧乏からぬけられないで、苦しいくらしとたたかっていました。

しかし、子どもは、そんなまずしさのなかでも、きっとたのしいあそびをみつけ、げんきにはねまわります。春は菜の花の田んぼが、おにごっこや忍者あそびのぶたいでした。夏はフナやコイやナマ

ズがうようよいる川のなかで日をくらします。秋は……冬は……子どもは、けっしてじっとしてはいません。

いまとちがって、おとなたちは遠くへかせぎに出かけることはなく、たいてい家のまわりの田畑ではたらきました。子どもは、はたらくおとなたちといっしょにくらしたのです。

そこで、百姓仕事をおぼえ、家の手つだいもします。ですから、おとなたちのよろこびやかなしみが、そのまま子どものこころに明るい光を投げたり、暗い影をおとしたりもしました。

そんなとき、子どもは、どうかんがえ、何をするでしょう。子どもは、そこで、おとなたちのかなしみ、よろこびを、じぶんなりに必死で分けあうのです。

子どもは、ただの子どもでばかりいるわけではないんですものね。そして、ときには、子どもの心が、おとなたちよりも美しく、りっぱに光りかがやきます。

そんな、こんな、お話を、してみたいとおもいます。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 空気がなくなる日

# 一

かなり以前のことである。

日本のどこから、あんなばかばかしいうわさがひろがったものか？

その年の七月二十八日という日に、ほんの五分間ほどのことだが、この地球上から、空気がなくなってしまうそうだという話が、やかましくなったものだ。

うわさをはじめてもちこんだのは、生徒たちの貯金を町へもっていった小使いのじいさんで、そのおそろしい日から、一週間まえのことであった。そのころは、いまみたいに、ひどいインフレでものが高いのとは反対に、なにもかも安くて、お金が手にはいらなかったから、学校でも、子どもたちから三セン五リンや五センというような、こまかいお金をまいにち持ってこさせて、だいじに貯金してやるというしごとをやっていた。小使いのじいさんは、それで、三日おきぐらいに、町の郵便局へでかけていたわけである。

「町のほうは、空気がなくなるはなしでたいへんですぞォ」

と、おびえたように、目をまるくしていった。

はじめ、先生たちは、笑ってあいてにならなかった。勉強をしている先生たちにとって、そんなばかげた話は、てんでうけとれなかったからである。

ところが、そのつぎの日になると、こんどは、校長先生が大さわぎをはじめた。

なんでも、県庁へつとめている友だちに、ゆうべあったのだそうで、その人の話では、このぶきみな災難が近づいていることは、世界じゅうの学者がみとめていることらしく、東京や大阪は、ものすごいさわぎだ、というのであった。

校長先生は、ひどくおちつかぬ顔で、むやみと、うすいドジョウひげをなでながら、先生たちにいったものである——

「わがはいのまなんだ学問からいえばじゃねえ、空気がどこかへふっとんでしもうちゅうことはじゃねえ……つまり、その、地球の引力がなくなるちゅうことじゃろ」

「すると、校長先生……」

と、ひとりの先生が口をいれた——

「この地球が消えてなくなるわけでしょうか」

「それが、わがはいには、がてんがいかん。たった五分間だけ、なくなるちゅうところをみると、地球は、やっぱり、わがはいら人類を永久にみすてるわけでもないらしい。してみると……」

「してみると、いかがですか」

「してみると……」

そこまでいってから、校長先生は、ニワトリみたいな、でかいふたかわ目を、しずかにみはって、いかにも一大事をうちあける人のように、あいての先生をのぞきこんだ——

「わがはいのまなんだ学問からいえばじゃねえ……つまり、この地球よりも、ずっとずっと、でっかくて重たい、たいへんな天体が……つまり星がじゃ、わがはいらの世界へ、デーンと近よってくるとみたね！」

「へへえ……」

と先生たちは、あおくなって、顔をみあわせた。

「すると、地球の引力が、そいつの引力に負けて？」

校長先生は、こっくりと、うなずいた。

「それなら、空気にかぎらず、ぼくら人間も、家も林も、ねこそぎ持っていかれるんじゃないでし

ようか」

「さ、そこじゃて……わがはいのまなんだ学問から……」

と、校長先生は、話にもったいをつけるときのきまりもんくを、もう一度くりかえして、

「いうてみりゃ、その天体からくる引力が、ちょうど、いちばん軽い空気をひっぱるだけの力しかはたらかぬというわけじゃろう。ああ、そういっているうちにも、わがはいは、なんだか息ぐるしくなってくるわい。こりゃいかん」

校長先生は、あわててまどのほうへ立っていくと、まいりかけたドジョウのように、おもての空気へあごをつんだして、ぱくぱく深呼吸をするのだった。

ところが、こんなさわぎのなかで、ただひとつ、校長先生をまごつかせたのは、これほどせけんがやかましくなっているのに、そのおそろしい七月二十八日の襲来について、文部大臣からも内務大臣からも、なんのおたっしもこないということであった。

大臣はじめ、みんなは、あまりの大事件にぼんやりしてしまったのであろうか？　しかし、それにしても、なにかしら、ちゃんとしたおたっしがこなくては、規則をやぶって学校を休むというわけにもいかないのである。

## 二

校長先生は、子どもたちをたいそう愛していた。

それで、とにかく、決心をかためた。

先生たちの指導で、どうすれば五分間を呼吸しないで生きられるかというけいこに、勉強はとうぶんうっちゃらかしということになった。

あっちこっちで、子どもたちは、胸いっぱい空気をすいこんでは、ヒフミヨイムナヤコト、ヒフミヨイムナヤ……とかぞえたり、ぞうきんバケツへくんだ水に、顔をつっこんで、耳たぶまでむらさき



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com